第３号議案　第 23 期事業計画（2022 年 7 月～2023 年 6 月）

日本の里山は、1980 年代にまず生物多様性の観点から自然保護の分野で再評価され、その後、生活文化の多様性とともに保全のための取り組みが展開されてきた。はじめは市民の環境運動として、1990 年代半ば以降は環境政策にも取り入れられ、2000 年代までは全国に里山保全活動は拡大していった。その中でも都市近郊の里山では、従来の自然保護運動と異なり、市民参加により新しいコモンズを創出しながら、身近な自然を保全してきたことに特徴があった。ところが 2010 年代に入ると、各地の里山保全団体において担い手の高齢化が進み、活動が停滞してきた。里山の担い手不足は獣害や自然災害とも関係することから、今日の里山は自然環境の問題よりも、地域コミュニティや災害の問題として取り上げられることが多い。一方、近年は地球温暖化の影響と見られる気象災害が頻発し、気候危機への対応が迫られるとともに、SDGs（持続可能な開発目標）に向けた行動も求められている。また、長く続くコロナ禍を経験して、身近な自然に体験や癒しを求める動きも強まっている。

このような里山をめぐる潮流の中で課題は山積し、複雑化しているが、NORA のコアメンバーも固定化・高齢化してきており、今後どのような方針のもとで事業を推進していくのか、明確なビジョンや中長期計画が描けていない。この模索期間にあって、下記のとおり 4 つの重点項目を掲げて事業に取り組んでいく。

①伴走支援を受けながらの MVV・中長期計画の作成

定款上の目的に掲げている「地域ごとに個性ある持続可能なコミュニティづくり」は、一人ひとりが主体性を発揮できる場づくりを通して目ざすべきものである。このプロセスで重視すべきは対話であり、他者との対話、自然との対話、自分との対話も含む。一方的に話すのではなく、聞くために耳をすませることを意識したい。社会が変わらないと不満を抱えているとき、変わるべきは自分たちであるかもしれない。

今日、子どもたちの体験の貧困や格差、ナラ枯れ被害の拡大、地域環境の担い手不足など、里山にかかわる課題は山積している。里山に軸足を置きながらも、環境保全、教育・福祉、貧困・格差、まちづくりなど、多様な社会問題と関連させつつ、広い視野を持って活動を展開したい。そのためには、あらためてミッション・ビジョン・バリューを共有したうえで、中長期計画を作成する必要がある。

腑に落ちないものを急いで作成する必要はないが、昨期も同様の計画を立てながら具体化に向けて動くことができなかった。今期は外部からの伴走支援を得ながら、SDGs の目標年である 2030 年を見据えて、ビジョン・中長期計画の作成を進める。

②コーディネーターを中心とした「はまどま」活用の推進

「はまどま」が「街なかの里山の入り口」として活用しやすくなるように、コーディネーターが中心になって環境づくりやルールづくりを進めるほか、新しい参加者・担い手を増やすために、ニーズ調査、企画支援・コーディネート、情報発信に力を入れる。

コロナ禍が続く中でも、「はまどま」の目的・運営体制・利用方法等について、今期中に

ホームページを立ち上げられる精度で必要な情報を整理する。また、週 1 回以上定期的に開室するほか、「はまどま」の活動を多様な手段で情報発信しながら、「はまどま」について地域住民をはじめ広く知っていただく。さらに、「はまどま」利用に興味のある潜在層に積働きかけ、ニーズを把握しながら新規の企画・プロジェクトの立ち上げを支援していく。

③里山への関心を向けるための絵本とカルタ・プロジェクト紹介動画の制作

今日の里山は、環境問題という視点よりも、自然豊かな子育て環境や丁寧な暮らしや地に足の付いた仕事を求める場として、またコロナ禍においては、特に都市住民にとって体験や癒しを求める場としても注目されている。実際に里山とかかわる機会がなくても、関心を持っていて、かかわる機会を求めている人はかなり多いと思われる。

そこで、これまで自然や里山に関心を持っていなかった都市住民に、絵本とカルタを通して里山の見方や感じ方などを伝える作品を制作する（「里山にかかわる暮らしを絵本などで楽しく表現し伝える」事業として、令和 4 年度「花博自然環境助成事業」に採択された）。

また、昨期に続き、里山関心層をターゲットにして NORA のプロジェクト紹介動画を制作する。

④新規事業の立ち上げと活動成果の発信を支援する助成制度の設計

新規事業の立ち上げや他団体との新たな協働・連携を促進するために、そうしたスタートアップを支援する制度を検討し、今期内に助成を開始する。また、これまで取り組んできた活動成果の情報発信を支援する制度についても、あわせて検討して助成を開始する。

以上の重点項目に取り組みつつも、定例の自主活動（ヤマ・ノラ・ムラ・ハレ・イキモノ）も着実に継続し、「根を持つことと翼をもつこと」を両立させていく。

自主事業

１．ヤマ事業

１）NORA の山仕事　{別紙計画書のとおり}

２）竹を活かす山仕事　{別紙計画書のとおり}

３）よこはま里山レンジャーズ（連携：自然環境復元協会）　{別紙計画書のとおり}

４）都市の里山の活用推進　{別紙計画書のとおり}
（令和 4 年度「緑の募金」公募事業、連携：NPO 法人足柄丹沢の郷ネットワーク）

５）山道具の安全使用（連携：株式会社シンコー）　{別紙計画書のとおり}

６）まちの近くで里山をいかすシゴトづくり

「里山とかかわる暮らし」と「里山をいかす仕事」の両立を求め、環境 NPO 運営スタッ

フ懇談会を定期開催し、バックオフィスの ICT 活用を進めるとともに事業協同組合の可能性を探る。また、多摩三浦丘陵群において里山の空間・資源をもとに事業を展開している他団体・個人等と具体的な協働のあり方を探り、「里山コネクト」の新たな活用を試みる。

７）安全で楽しい森林づくり活動を指導できるリーダー養成事業
（主催：モリダス、令和 4 年度「緑と水の森林ファンド」、）
　モリダス主催事業と共催するかたちで人材育成事業を実施し、安全で楽しい里山保全・森林づくり活動を指導できる現場リーダーを養成するほか、横浜・多摩地域の活動団体のネットワークを強化する。

２．ノラ事業
１）森と畑と音楽と　{別紙計画書のとおり}

３．ムラ事業
１）はまどまプロジェクト
(1) NORA 野菜市　{別紙計画書のとおり}
(2) もったいないから竹細工　{別紙計画書のとおり}
(3) はぶすぱラボ　{別紙計画書のとおり}
(4) はまどまで土間仕事　{別紙計画書のとおり}
(5) 『食べもの通信』読者会　{別紙計画書のとおり}
(6) はまどま諸々　{別紙計画書のとおり}
　・季節の素材でスイーツメイキング
　・お香のてならい～金曜夜のお香づくり体験
　・心も体も元気に季節の薬膳食事会

２）地域連携・ネットワーク
　南区役所、宮宿花 1・2 丁目町内会、蒔田公園愛護会、フォーラム南太田、睦地域ケアプラザなど、蒔田地区周辺の公共機関・団体との連携を深める。また、まいたエコサロンの会、横浜コミュニティカフェネットワークの一員として、ネットワーク活動に協力する。

４．ハレ事業
１）20 周年記念事業
　今期の重点項目の 1 つとして、絵本とカルタおよびプロジェクト紹介動画を制作する。

５．イキモノ事業
１）トンボはどこまで飛ぶかフォーラム
　フォーラムの一員として森里川海と連携し、生物多様性保全に繋がる活動を実施する。

６．広報事業

１）ウェブサイト更新・メールマガジン配信・SNS による情報発信

ウェブサイトの記事掲載については、一部の会員に負担が集中しないよう役割分担を進める。ウェブサイトと連携しながら、定期的に「里山と暮らしをつなぐメールマガジン」を配信して、効果的に情報を発信する。また、SNS（Twitter・Facebook・Instagram・YouTube）を利用して、柔軟に迅速に情報を発信するとともに、ウェブサイトとの相乗効果を高める。

２）活動報告書の作成

2022 年の活動報告書を作成し、年末に年会費の依頼とともに会員に送付する。

協働・受託事業

適宜、社会のニーズに応じて協働・受託事業を進める。また、ボランティア体験、インターンシップの受入は、可能な限り引き受ける。

・森づくりボランティア体験事業業務（横浜市環境創造局）
・横浜市保育所・小中学校等ビオトープ整備等指導業務（横浜市環境創造局）
・長浜公園トンボ池管理等業務（横浜市緑の協会）
・根岸森林公園トンボ等調査（横浜市緑の協会）
・野島公園ビオトープ環境改善業務（横浜市緑の協会）
・トンボとり大作戦開催業務（横浜植木}
・里地里山入門講座企画実施業務（横浜市環境創造局）
・Green Gift 地球元気プログラム（NPO 法人日本 NPO センター）

委員・講師派遣

行政・NPO・大学等からの求めに応じて、里山保全や市民活動等に関する委員・講師を派遣する。